



No. 152

ティークレイク

Tea Break

ゲーム理論の向こう側に

会員 正林 真之

じゃんけんでは、グー、チョキ、パーで、勝つ確率は均等ではない。パーを出すと勝つ確率が高い。その理由は、じゃんけんをするときには、まず、こぶしを握り締めてから次の動作をする。だから、何も考えずに出されたものは、グーである可能性が高い。なので、パーを出せば、それだけ勝つ確率が高いというわけである。このように、ゲームにおいて、勝つ確率が高いほうに常に賭けることによって、勝つ方法を追及する理論。それがゲーム理論である。

ゲーム理論というのは、まずは経験則があって、その後理由付けがなされる。そうであるがゆえに、経験者や年長者は、たまにそれを経験的に習得していることがある。じゃんけんでも、年長者のほうが有利であることが多い。例えば、私の従兄は殆ど年上であり、そうした彼らには、じゃんけんでは、いつも勝てなかった。

ただ、ある時に彼らに聞いたら、最初にパーを出す手法というのは、なんと、私の父に教わったという。あんな堅物の父が、今も昔もそうであるあの父がその手法を知っていたというのは、私にとってはかなりの意外性があり、ちょっとした驚きであった。

そういえば、父とは、じゃんけんに関する思い出がある。幼少の頃のある夏の暑い日に、おもちゃを買ってもらった。とても欲しかったものだったので、ちょっと重たかったのだが、それでも自分で持つと主張した。けれども、それは小学校の低学年にとっては、かなり重たい代物であった。でも自分は、とても欲しかったものなので、自分で持っていきかけた。なので、そのように強硬に主張した。

しかしながら、物理的な重量というのは自然法則に忠

実で、ある意味、とっても残酷なものである。取っ手は指に喰い込み、額から汗がダラダラと落ちる。顔は歪み、足取りは自然に重くなる。

そこで父が提案した。「じゃあ、じゃんけんをして、負けたほうが、持って歩こう」と。というわけで、大人と子供のハンディから、父が負けたら100歩、自分が負けたら30歩ということで、話し合いが成立した。そうして自分は、重荷を運ぶ重労働から大部分、解放されることとなった。

今になって考えると、父はわざと負けてくれていたのかもしれない。けれども、昭和一桁生まれの父である。たとえそうであったとしても、今になっても本当のことなど言うはずがない。

ただ、今になって、こうして小学生の息子を持つてみると、なるほど、子供の考えていることなど、すぐに分かる。特に男の子というのは、いつまでたっても子供なので、娘よりも勝つのが、たやすい。おそらく、じゃんけんなら、全勝することも可能だ。

今こうして、小学生の息子と自宅に通じる赤坂の坂道を上っている。子供にとっては、かなり重たい荷物である。けれども、いかにも私の子供らしく、自分が欲しかったものだから自分で持って行くと、強硬に主張した。

そうしてふと、なぜかあの頃の思い出が蘇り、その思い出が自分を突き動かす。口からは自然に、「じゃあ、じゃんけんをしようか。負けたほうが荷物を持つんだ。父さんが負けたら100歩、お前が負けたら30歩な」。息子は、自分自身で持って行きたいのに、助けてもらいたい。そんな気持ちであることが、その表情からありありと分かる。大人と違って、子供というのは、本当に正直である。

じゃんけんも、次に何が出るのか、ほぼ確実に分かる。なので、わざと負けてやって、自分が持つようにしてあげられる。そうして暫くすると、最初は重労働から解放されて喜んで息子は、何かちょっと物足りなそうである。そう、やはり欲しかったものだし、それがやっと自分のものになったのだから、自分でも持ちたいのだ。重さを実感したい。その重さで幸せを実感したいのだ。それこそが、自分自身の本当の喜びになることを、こんな子供でも知っている。

なので、今度はわざと勝ってやる。

そう、今になって思えば、あの日、父は時々、微妙なタイミングで勝っていた。そう、父は、わざと負けてくれていただけではない。おそらく、自身が全敗できる状況の中で、わざと勝ってくれていたのだ。

結婚しても子供を持たず、開業をしても部下も持たず。こんな生き方もある。確かに子を持つだけで苦勞も増える。部下も同様である。

ただ、こんな経験を通じてしか、親にしてもらったことの本当のありがたみはわからない。これも一つの成長というものなのかもしれないが、親子関係ひとつとっても、本当に理解するためには、実際に同じ立場になってみなければ分からない。いずれにしても、ゲーム理論だけでは割り切れない、それなりの時間と経験が必要なようである。

でも、父も本当は、その父に同じようなことをしてもらったのでは…。いや、もう、そんなことを考えるのは、よそう。今ではただ、目の前に居るこの子にも、同じような瞬間がまた訪れんことをと願うばかりである。

そしてそれは実は、私に対する私の父も同じだったのかもしれないが、そんなことはゲーム理論を駆使しても的中させることができるはずもなく、ただただ今は、自分の子に対してそのチャンスが訪れる偶然を祈るばかりなのである。

